『徒然草』における兼好の二面性と進取の章段について

――現実主義・東国人への敬意・迷信打破・宋学受容――

小山田　光　廣

はじめに

「何事も古き世のみぞ慕はしき」[1]で始まる『徒然草』第二十二段は、兼好の尚古思想が最もよく披瀝された章段といえよう。兼好は「うつくしき器物」、「文の詞」、「ただ言ふ言葉」の三つを取り上げ、王朝時代の古風な調度品や消息文の反古、日常の言葉遣いに対する憧れを述べている。そうした価値観は、家居や人の振る舞いにも及び、わざとらしい振る舞いや、一見人目を引く珍しい物を忌避する兼好の姿勢としても随所に表れており、久保田淳氏は「徒然草のいわゆる第一部、第二部を通じてかれはまぎれもない尚古主義者であり、保守的美学の信奉者である」[2]と述べる。

また第二十二段の「かの木の道の匠の造れる、うつくしき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ」は、加藤盤斎『徒然草抄』以来、『源氏物語』帚木巻の雨夜の品定めに見られる芸道論を受けているとされ、[3]稿者は、こうした価値観が伝統的で簡素な物を志向する兼好の意識の源泉となっていたことを指摘した。[4]さらに、このような意識は、兼好が多言を慎むことをよしとしているところにもよく表れており、『九条右丞相遺誡』や『源氏物語』における光源氏の姿を通してうかがわれる王朝貴族の言行に関する規範が、兼好の「よき人」の理想の中にも受け継がれていたことを明らかにした。[5]

しかしながら、兼好は、一途に王朝時代を思慕し、伝統に固執していたわけではない。第百二十二段の最後には「詩歌に巧みに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて世を治むること、漸く愚かなるに似たり。金はすぐれたれども、鉄の益多きにしかざるが如し」とあり、現実を冷静に見つめていたのである。

藤原克己氏は、新しい時代や人間を鋭く観察した章段として第二百十七段を取り上げている。藤原氏は、兼好が、鎌倉時代における貨幣経済の全国的展開により、ただひたすら貨幣のために貨幣を貯めるというまったく新しいタイプの人間が出現したことに目を見張り、そのような新しいタイプの人間を、仮構された「ある大福長者」の言葉によって理念型化しているのだと指摘する。[6]

そのように兼好は、伝統を重んじる尚古主義的な価値観と、新し

い時代や人間を見つめる現実主義的な見方の二つの側面を併せもつといえる。本稿では、兼好が古い価値観にとらわれることなく、新しい時代や人間について述べた章段を進取の章段と位置づけ、現実主義、東国人への敬意、迷信打破、宋学受容という四つの軸から考察したい。

一　兼好の現実主義的価値観（第一の軸）

第一の軸は、兼好の現実主義的な価値観である。第百二十二段を全文引用する。

人の才能は、文にあきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手書くこと、むねとすることはなくとも、これを習ふべし。学問に便りあらんためなり。次に医術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝のつとめも、医にあらずはあるべからず。次に弓射、馬に乗ること、六藝に出だせり。必ずこれをうかがふべし。文・武・医の道、まことに欠けてはあるべからず。これを学ばんをば、いたづらなる人といふべからず。次に食は、人の天なり。よく味はひを調へ知れる人、大きなる徳とすべし。次に細工、よろづに要多し。

このほかのことども、①多能は君子の恥づるところなり。詩歌に巧みに、絲竹に妙なるは幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて世を治むること、漸く愚かなるに似たり。②金はすぐれたれども、鉄の益多きにしかざるが如し。

（第百二十二段）

兼好は、備えておきたい素養として漢籍の学問、書道、医術、弓馬、食、手工芸の六つを挙げる。確かに、第一段にも「ありたきこと、まことしき文の道、作文・和歌・管絃の道。また有職に公事の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手などつたなからず走り書き、声をかしくて拍子とり、いたましうするものから下戸ならぬこそをのこはよけれ」とあって、経書の学問、書道、漢詩、和歌、管絃といった王朝貴族の伝統的素養が列挙される。しかし、第百二十二段は、実用的な素養に力点が置かれている点で大きく異なる。

次に、実用的素養の四つを検討する。一つめは医術である。「忠孝のつとめも、医にあらずは…」の出典は、『小学』外篇・嘉言第五の程伊川の言葉である「事親者、亦不可不知医（親に事ふる者、亦医を知らざる可からず）」[7]であると『徒然草寿命院抄』[8]（以下『寿命院抄』とする）が注釈している。和島芳男氏は、『小学』が早く東国金沢の地に伝来したにもかかわらず、金沢氏はほとんど宋学を受容していなかったと指摘している。[9]しかし、『兼好法師家集』の記述から兼好が少なくとも二度金沢の地を訪れたとされる通説を考慮すると、兼好が金沢の地で『小学』に触れていた可能性も考えうる。

二つめは弓馬である。第二百三十八段では、馬芸の名人近友になって兼好も七つの自賛譚を述べるが、その第一には、最勝光院で馬を走らせる男の様子を見て、後の落馬を予想し的中した話が記される。また第百八十五段では、馬芸に通じた安達泰盛の馬を見極め心掛けを、続く第百八十六段でも、馬の様子や馬具の安全にも配

慮すべきだとする乗馬の秘訣を紹介する。ここでは、弓馬が王朝的素養とは対局のものであることが注目される。

三つめは食である。「食は、人の天なり」の出典として『寿命院抄』は、『帝範』務農の「夫食爲人天。農爲政本（それ食は人の天たり。農は政の本たり）[10]」を挙げている。兼好は儒教の帝王学の書を引き、人間生存に不可欠な食の大切さを説いているのである。

四つめの細工について、第二百二十九段には、「よき細工は、少し鈍き刀を使ふと言ふ。妙観が刀はいたく立たず」とあり、工芸の技術に対する兼好の関心が知られる。

また、右第百二十二段の第二段落では、次の二点が留意される。一つめは、『寿命院抄』が、傍線部①「多能は君子の恥づるところなり」の出典を、『論語』子罕第九の「吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不多也（吾れ少くして賤し。故に鄙事に多能なり。君子、多ならんや。多ならざるなり）[11]」と注するように、『論語』の言葉を引き君子の素養にも言及していることである。二つめは、兼好が、金の優れた価値と鉄の実用性を比較する例えを挙げ（傍線部②）、第一段の理想や、詩歌・管絃といった幽玄の道による政治の限界を感じていたことである。

そこで、実用的な素養のうち医術及び食の二点に絞って考察したい。第百二十三段には、

無益のことをなして時を移すを、愚かなる人とも、僻事する人とも言ふべし。国のため君のために、やむことを得ずしてなすべきこと多し。その余りの暇、いくばくならず。思ふべし、人の身にやむことを得ずしていとなむ所、第一に食ふ物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。饑ゑず、寒からず、風雨に侵されずして、閑かに過すを楽しびとす。但し、人皆病あり。病に冒されぬれば、その愁へ忍びがたし。医療を忘るべからず。薬を加へて四つのこと求め得ざるを貧しとす。この四つ欠けざるを富めりとす。この四つのほかを求めいとなむを驕とす。四つのこと倹約ならば、誰の人か足らずとせん。

（第百二十三段）

あり、次の二点が着目される。一つめは、人間生存に必須な食の重視である。前の第百二十二段でも、『帝範』を引き国政の要である食の重要性が述べられていた。

二つめは、医療の重視である。安良岡康作氏は、仏教の四事である僧の日常生活に必要な飲食、衣服、臥具、医薬との関係を指摘し、[12]これをふまえた三角洋一氏は、衣食住の知足に医療を追加した儒仏老荘にわたる二段構えの展開であると論じる。[13]

以上、兼好は、第百二十二段では『小学』や『帝範』といった儒教の立場から、第百二十三段においては、三教一致の立場から食と医の重要性を述べているのである。

最後に、第二百二十四段を検討する。

陰陽師有宗入道、鎌倉よりのぼりて尋ねまうで来りしが、まづさし入りて、「この庭のいたづらに広きこと、あさましく、あるべからぬことなり。道を知る者は植うることを努む。細道一つ残して、皆畠に作り給へ」といさめ侍りき。

まことに、少しの地をもいたづらに置かんことは益なきことなり。食ふ物・薬種などを植ゑ置くべし。（第二百二十四段）

有宗は、鎌倉幕府に仕えた陰陽師であるとされ[14]、何も植えられていない兼好の広い庭を見て、物事の道理を知る者は実用的な草木の栽培に努めるものだと忠告する。医と食の重視は、第百二十二段、第百二十三段とともに一貫している。

またこのように兼好は、東国人である有宗の助言に深い感心を示している。そこで次節では、兼好の東国人への敬意について考察したい。

二　兼好の東国人への敬意（第二の軸）

第二の軸は、兼好の東国人への敬意である。第百四十一段を吟味する。

悲田院尭蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、双なき武者なり。故郷の人の来りて、物語すとて、「吾妻人こそ、言ひつることは頼まるれ、都の人は、ことうけのみよくて、まことなし」と言ひしを、聖、「それはさこそおぼすらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情あるゆゑに、人の言ふほどのこと、けやけくいなびがたくて、よろづえ言ひはなたず、心よわくことうけしつ。偽りせんとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意とほらぬこと多かるべし。吾妻人は、我が方なれど、げには心の色なく情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、はじめより否と言ひてやみぬ。にぎはひゆたかなれば、人には頼まるるぞかし」と、ことわられ侍りしこそ、この聖、声うちゆがみ、荒々しくて、聖教の細やかなる理いとわきまへずもやと思ひしに、この一言の後、心にくくなりて、おほかる中に寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと覚え侍りし。

（第百四十一段）

当初、兼好は、尭連上人の方言や荒々しい態度を見て、仏典の精緻な教理には疎いかと思っていた。しかし、都人と吾妻人を気質や経済事情の違いから公平に分析した尭連上人の一言は、兼好の観方を一変させる。兼好は、尭連上人の細やかな人間観察に一目置き、東国人であってもそれを評価する柔軟性を持ち合わせていたのである。

次に、第百八十四段を全文引用する。

相模守時頼の母は、松下禅尼とぞ申しける。守を入れ申さることありけるに、煤けたる明り障子の破ればかりを、禅尼手づから、小刀して切りまはしつつ張られければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「給はりて、なにがし男に張らせ候はん。さやうのことに心得たる者に候」と申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景、「皆を張り替へ候はんは、はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも見苦しくや」とかさねて申されければ、「尼も、後はさはさはと張り替へんと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐることぞと、若き人に見習はせて、心つけんためなり」と申されける、いとありがたかりけり。

世を治むる道、倹約を本とす。女性なれども、聖人の心に通へり。天下を保つほどの人を子にて持たれける、まことに、ただ人にはあらざりけるとぞ。

（第百八十四段）

松下禅尼は、煤に染まった障子の破れの一つ一つを自ら張り替え、新しい所と古びた所が斑になった状態を敢えて見せ、息子の時頼に倹約の心構えを教えようとした。兼好は、禅尼が儒学で理想とされる聖人の心構えを備えていることに深い敬意を覚えたのである。

次に、第二百十五段を検討する。

平宣時朝臣、老の後、昔語りに、「最明寺入道、ある宵の間に呼ばるることありしに、『やがて』と申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、また使来りて、『直垂などのさぶらはぬにや。夜なれば、異様なりとも疾く』とありしかば、なえたる直垂、うちうちのままにて罷りたりしに、銚子に土器取りそへて持て出でて、『この酒を独りたうべんがさうざうしければ、申しつるなり。肴こそなけれ、人は静まりぬらん、さりぬべき物やあると、いづくまでも求め給へ』とありしかば、紙燭さして、隈々を求めしほどに、台所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、『これぞ求め得て候』と申ししかば、『ことの足りなん』とて、心よく数献に及びて、興に入られ侍りき。その世には、かくこそ侍りしか」と申されき。（第二百十五段）

平宣時の老後の思い出話として、北条時頼が、直垂を探して遅くなっていた宣時や寝静まった家人を気遣い、素焼きの皿についた少量の味噌を肴に気持ちよく数献を交わした姿が描かれる。これは、松下禅尼の倹約精神を受け継いだ理想的な為政者そのものといえよう。

最後は、第二百十六段である。

最明寺入道、鶴岡の社参の次に、足利左馬入道の許へ、まづ使を遣して、立ち入られたりけるに、あるじまうけられたりける様、一献に打ち鮑、二献に海老、三献にかいもちひにてやみぬ。その座には、亭主夫婦、隆弁僧正、あるじ方の人にて座せられけり。

さて、「年毎に給はる足利の染物、心もとなく候」と申されければ、「用意し候」とて、色々の染物三十、前にて、女房どもに小袖に調ぜさせて、後に遣されけり。

その時見たる人の、近くまで侍りしが、語り侍りしなり。

（第二百十六段）

北条時頼が、鶴岡八幡宮参拝の折、足利義氏にもてなされ、献立は三献のみで終わったという。つまり、第百八十四段、第二百十五段、第二百十六段には、松下禅尼から時頼に続く鎌倉幕府の質素倹約の精神が描かれている。第二段においても『九条右丞相遺誡』や『禁秘抄』の倹約を説いた言葉が引かれ、為政者の倹約を重視する兼好の姿勢が知られる。

以上、第二の軸として兼好の東国人への敬意を考察した。確かに、兼好は、第百三十七段において、花の本にねじより酒を飲んで連歌をする、あるいは祭の行列にしか興味のないような「片田舎の人」を冷ややかに見ていた。しかし、細やかに人間を見つめる尭連上人や、為政者の倹約を重視する松下禅尼と北条時頼には深い敬意を示していたのである。

三　迷信打破（第三の軸）

第三の軸は、迷信打破である。第九十一段には、

赤舌日といふこと、陰陽道には沙汰なきことなり。昔の人これを忌まず。このころ、何者の言ひ出でて忌み始めけるにか、「この日あること、末とほらず」と言ひて、その日言ひたりしこと、したりしことかなはず、得たりし物は失ひつ、企てたりしことならずと言ふ、愚かなり。吉日を撰びてなしたるわざの末とほらぬを数へて見んも、また等しかるべし。

そのゆゑは、無常変易の境、ありと見るものも存ぜず。始めあることも終りなし。志は遂げず。望みは絶えず。人の心不定なり。物皆幻化なり。何事か暫くも住する。この理を知らざるなり。「吉日に悪をなすに、必ず凶なり。悪日に善を行ふに、必ず吉なり」と言へり。吉凶は、人によりて、日によらず。

（第九十一段）

とあり、次の三点が留意される。一つめは、吉日を選んで成就しなかった件数も、赤舌日に不成功に終わった件数に等しいはずだという兼好の合理的な思考である。二つめは、兼好が、世の中は絶えず移り変わるという無常変易の道理によって赤舌日を否定していることである。三つめは、「吉凶は、人によりて、日によらず」の出典であり、『寿命院抄』が『古今事文類聚前集』巻十二・天時部に収められる唐・沈顔の「時日無吉凶弁」に類似すると注釈して以来踏襲されてきた。しかし小川剛生氏は、同趣の格言はすでに『春秋左氏伝』にも見えることを指摘している。[15] つまり、典拠は、宋代の類書か、漢籍に通じた兼好が漢籍の古い格言として引用した可能性もある。

次に、第二百六段を取り上げる。

徳大寺故大臣殿、検非違使の別当の時、中門にて使庁の評定行はれけるほどに、官人章兼が牛放れて、庁屋のうちへ入りて、大理の座の浜床の上に登りて、にれうちかみて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへつかはすべきよしし、おのおの申しけるを、父の相国聞き給ひて、「牛に分別なし。足あれば、いづくへか登らざらん。尪弱の官人、たまたま出仕の微牛を取らるべきやうなし」とて、牛をば主に返して、臥したりける畳をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。

「怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみかへりて破る」と言へり。

（第二百六段）

益田勝実氏によれば、『玉葉』には九条兼実の家に牛が入って来た際、祓除のために陰陽師のもとに届けられた先例が存在する。[16] これに対して、牛に思慮はなく足があればどこにでも登るという実基の考えは、非常に合理的な判断である。また、微禄の官人が出仕する時の牛を取り上げられる理由はないとする配慮には、実基の優しさやせ牛を取り上げられる理由はないとする配慮には、実基の優しさも感じられる。

この段の最後の「怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみかへりて破る」の出典は、早く『寿命院抄』が「千金方黄帝雑忌呪曰、見怪不怪、其怪自壊」と注し、近年では宋の高邁『夷堅志』によるとされた。[17] しかし、三角洋一氏は、同趣の文言が『碧巌録』巻三・第二十二則の「見怪不怪、其怪自壊、大小大怪事、不妨令人疑著」や『仏国禅師語録』といった禅僧の語録に多く見られることを指摘し、[18] 小川剛生氏も同様の注を付す。[19]

続いて第二百七段を見ていきたい。

亀山殿建てられんとて、地を引かれけるに、大きなる蛇、数も知らず凝り集りたる塚ありけり。「この所の神なり」と言ひて、ことのよしを申しければ、「いかがあるべき」と勅問ありけるに、「古くよりこの地を占めたる物ならば、さうなく掘り捨てられがたし」と皆人申されけるに、この大臣一人、「王土にをらん虫、皇居を建てられんに、何の祟りをかなすべき。鬼神はよこしまなし。咎むべからず。ただ皆掘り捨つべし」と申されたりければ、塚を崩して、蛇をば大井河に流してげり。

さらに祟りなかりけり。

（第二百七段）

亀山殿建設に際して、大きな蛇が数え切れないほど密集している塚の処遇に窮していた。しかし、実基一人だけは、天皇の治める土地に住む虫類が、皇居建設に祟りを起こし邪道な行いをすることはないと主張する。蛇はすべて大井河に流されてしまったが、全く祟りはなく、いかに実基の合理的思考による迷信打破が痛快であったかを物語っている。

以上、第九十一段では、兼好が合理的思考と無常の観点から赤舌日の迷信を論破したとともに、宋学もしくは漢籍の古い格言をもって説明しようとした可能性を検討した。また第二百六段及び第二百七段では、徳大寺実基による迷信克服が、宋学の言葉により説明される。『徒然草』の執筆年代は、宋代文化の流入した時代と重なる。[20] そこで次節では、第四の軸として宋学を取り上げたい。

四　宋学受容（第四の軸）

第四の軸として兼好の宋学受容を考察する。第百五十五段の第二段には、

春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋は通ひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり、梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる気、下にまうけたるゆゑに、待ちとるついで甚だ速し。

生老病死の移り来ること、またこれに過ぎたり。四季はなほ定まれるついでありき。死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。人皆死あることを知りて、待つこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の満つるが如し。

（第百五十五段）

とあって、春が終わってから夏、夏が終わってから秋が来るのではなく、春のうちに夏のの気配が兆し、夏の間に既に秋が通い、秋はすぐに寒くなり、冬の始めの十月は、小春日和の天気で草も青くなり、梅も蕾をつけるという。つまり季節は、現在の季節の中に次の季節が兆しつつ推移するのだというのである。さらに木の落葉についても、落葉の後に萌芽するのではなく、葉の下から芽が出る勢いに堪えられなくなって落葉するのだという。

こうした兼好の季節感や自然観察について、永積安明氏は、「季節や生命の転化の相が、ほとんど弁証法的な発展において、とらえられている[21]」と述べている。これを受けて久保田淳氏は、「木の葉の落つるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり」の出典として、

この葉なきむなしき枝に年くれてまためぐむべき春ぞちかづく　（『玉葉集』巻第六・冬歌・前大納言為兼・一〇二二）[22]

を挙げ、為兼の歌や宋学的思考が、兼好の脳裏にあったと論じる。[23]

確かに、第百五十五段における兼好の四季や自然に対する論理展開と為兼の和歌には、理知的で宋学的な思想との共通性が見出だされよう。しかし、為兼の歌は、木の葉の落ちた枯れ木が年を明かし芽吹く春がやって来る旨であり、兼好の説く、今の季節の中に次の季節が兆し始めているという四季観や、下から兆す萌芽による落葉といった自然観察を見出すことはできない。むしろ兼好の思想に近いのは、田辺爵氏の指摘する、[24]

をのづからかきねの草もあをむなりしものしたにも春やちかづく　（『風雅集』巻第八・冬歌・伏見院御歌・八九一）[25]

という歌であり、為兼と同じ京極派の伏見院は、墻根の草が自然と青む様子を見ながら、霜の下に兆し始めている春の訪れを詠んでいる。これは冬であっても、春の兆しとして草の葉が青み始めることを述べた、第百五十五段の兼好の自然観察と近似する。

しかし、これ以上に兼好の思想と合致するものとして、中川徳之助氏は次のような朱子の言葉を指摘している。[26]

問。十月為陽。不応一月無陽。恐陽是生於此月。但未成体耳。曰。九月陰極則陽已下生。謂如六陽成六段。而一段又分作三十小段。従十月積起至冬至即成一爻矣。不成一陽是陡頓生。亦須従分毫積起。且天運流行本無一息間断。豈解一月無陽。且如木之黄落。黄落時萌芽已生了。不特如此。木之冬青者。必先生萌芽。而後旧葉方落。（『通志堂経解』朱文公易説・巻四・黄義剛録、『朱子語類』巻七十一にも）

以下、私に訓読を試みる。

（黄義剛）問ふ。「十月を陽と為す。応に一月も陽無かるべからず。恐らくは陽是れ此の月に生ぜん。但だ未だ体を成さざるのみ」と。（朱子）曰く。「九月陰極れば則ち陽已に下に生ず。謂ふに六陽六段を成し、而して一段又分て三十小段を作すがごとし。十月より積起し冬至に至りて即ち一爻を成す。一陽是れ陡頓に生ずるを成さず。亦た須らく分毫より積起すべし。且つ天運流行本より一息の間断なし。豈に一月陽なしと解せんや。且つ木の黄落するがごとき、黄落の時萌芽已に生じ了る。特に此のごとくなるのみにあらず。木の冬青なる者も、必ず先ず萌芽を生じて、而る後に旧葉方に落つ。

朱子は易の陰陽の観点により、十月から陽の気が生じ始めることを説く。これは、陰暦十月の冬であっても草が青み始めるという兼好の考えと一致する。また「且天運流行本無一息間断」とあり、季節の推移は絶え間なく連続するものであるとしている。

さらに注目したいのは、最後の「且如木之黄落。黄落時萌芽已生了。不特如此。木之冬青者。必先生萌芽。而後旧葉方落」の一節である。朱子は、季節の変遷が木の黄落のようであり、黄落の時には

すでに萌芽が生じていると説く。さらに木の葉が冬に青み始める時も、必ず先に萌芽が生じてから枯れ葉が落ちると述べる。これは、第百五十五段における「木の葉の落つるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり」と極めてよく一致している。中川氏は「それでただちに出典を云云する気はない」と慎重に保留しておられるが、第百五十五段における兼好の季節感や自然観察は、朱子の言葉そのものである。当時は日本と宋・元との間で禅僧の交流が頻繁に行われ、兼好が耳学問であっても朱子の言葉に触れた可能性は十分に有り得る。宋学においては『易経』が尊重され、中世禅林においても重視された点[27]を考慮すると、兼好は京極派的な自然観察も身につけながら、最新の宋学の知識によって第百五十五段を執筆したとは言えまいか。

ここで、中世における儒学学習のあり方にも留意しておきたい。川本慎自氏によれば、中世の儒学学習は、禅僧により禅宗寺院を中心に行われ、新たに宋学が伝来し朱子による新註が受容された。宋学では『論語』『孟子』『大学』『中庸』の四書が中心的な儒典とされ、日本に受容された儒学のうち、宋学とそれ以前の儒学とを区別するには、『孟子』学習の有無が一つの目安になるという。[28]そこで『論語』及び『孟子』を取り上げて兼好の宋学受容を考察してみよう。

まず、『論語』について。曹景恵氏は、『論語』を典拠とする章段四つを詳細に検討し、兼好の『論語』解釈は、何晏『論語集解』、皇侃『論語義疏』といった『論語』古注に拠っており、朱子の新註説の影響は認められないと論じている。[29]

確かに、曹氏の指摘をふまえると、『論語』の引用をもって、兼好の宋学受容を考えることは難しいかもしれない。しかしながら、『徒然草』において『論語』を引用する章段は、全二百四十四章段中十七章段であり他の書目を圧倒する。[30]先述した第百八十四段の「世を治むる道、倹約を本とす」の出典は、『論語』里仁第四の「子曰、以約失之者、鮮矣（子の曰わく、約を以てこれを失する者は、鮮し）」もしくは、『論語』述而第七の「子曰、奢則不孫、検則固（子の曰わく、奢れば則ち不孫、検なれば則ち固なり）」であると、『野槌』が指摘している。[31]さらに兼好は、第百八十八段と第二百三十八段において『論語』の言葉と書名を直接引用している。第百八十八段では、『論語』陽貨第十七の「敏則有功（敏なれば則ち功あり）」の言葉を引き、仏道修行をして悟りを開くという一大事の因縁に急ぐべきことを説く。また、第二百三十八段における自賛譚では、後醍醐天皇が皇太子の頃、東宮に命じられた堀川大納言具親が、『論語』陽貨第十七の「悪紫之奪朱也（紫の朱を奪ふを悪む）」という本文の場所を見つけることに手間取っていた折、居合わせた兼好が、九巻のどの辺りにあると素早く言い当てた逸話が披瀝されている。

このように兼好は『論語』に精通しており、自身の思想を表現する際にも多く引用している。『論語』が、宋学において四書として注目されたことも勘案すると、兼好の『論語』への言及に宋学受容が全く関わっていないとはいえないのではなかろうか。

次に『孟子』であるが、第八十五段、第百四十二段、第二百十七段の三つの章段で引用されている。ここでは第百四十二段の第二段落を取り上げてみよう。

世を捨てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ望みふかきを見て、無下に思ひくたすは、僻事なり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからん親のため妻子のためには、恥をも忘れ盗もしつべきことなり。されば、盗人をいましめ僻事をのみ罪せんよりは、世の人の饑ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人、恒の産なき時は恒の心なし。人窮まりて盗みす。世治まらずして、凍餒の苦しみあらば、科の者絶ゆべからず。人を苦しめ法を犯さしめてそれを罪なはんこと、不便のわざなり。

（第百四十二段）

「人、恒の産なき時は恒の心なし」は、生活が安定しなければ、心も安定しないことであり、出典は『孟子』梁恵王上の「若民、則無恒産、因無恒心（民の若きは、則ち恒産無ければ、因って恒心なし）[32]」であると『寿命院抄』が指摘している。次に、「人窮まりて盗みす」は、人間がせっぱつまって盗みを働くことで、出典は『孔子家語』巻第五・顔回第十八の「鳥窮則啄、獸窮則攫、人窮則詐、馬窮則佚（鳥窮すれば則ち啄み、獸窮すれば則ち攫み、人窮すれば則ち詐り、馬窮すれば則ち佚す[33]）」もしくは、『論語』衛霊公「小人窮斯濫矣（小人窮すれば斯に濫る）」であり、また「凍餒の苦しみ」は飢えや寒さの苦しみのことであるが、出典は『孟子』尽心上の「五十非帛不煖、七十非肉不飽。不煖不飽、謂之凍餒（五十は帛に非ざれば煖かならず。七十は肉に非ざれば飽かず。煖かならず飽かざるをば、之を凍餒と謂ふ）」であると『野槌』は注している。

『孟子』梁恵王上篇は、孟子の王道政治の根幹をなす章であり、「人、恒の産なき時は、恒の心なし」という食の確保による民衆生活の安定はその要点である。第百二十二段でも、『帝範』を引き国政の本となる食の重要性を述べ、為政者の心構えを問題としていた。

以上、第百四十二段において、兼好は、自身の精通する『論語』や『孟子』の言葉を引用し、民生の安定に必要な食の重要性と為政者の倹約を力強く主張していた。第四の軸である宋学受容は、為政者の倹約を重視する兼好の姿勢と深く結びついているといえよう。

五　おわりに

『徒然草』における兼好の二面性と進取の章段について、四つの軸から考察を試みた。

第一の軸は、現実主義的な価値観である。兼好は、王朝政治の限界を感じ、実用的な素養と為政者の心構えを重視していた。特に食と医術の必要性は、儒教の帝王学や最新の宋学書（『小学』）によって裏付けられ、陰陽師有宗入道の言葉によっても語られた。

第二の軸は、東国人への敬意である。兼好は、人間の気質を細やかに把握する尭連上人を高く評価し、倹約の精神を持つ松下禅尼や北条時頼に対しても深い敬意を示していた。

第三の軸は、迷信打破である。第九十一段では、兼好が合理的思考と無常変易の理論をもって赤舌日の迷信を打破したとともに、宋学もしくは漢籍の古い格言により裏付けしようとした可能性を検討した。また、兼好は、合理的思考により次々と迷信を打破する徳大寺実基に関する逸話を痛快に描き、宋学の言葉を引用しながら説明していた。

第四の軸は、宋学受容である。第百五十五段における兼好の季節感や自然観察は、朱子の『易経』の言葉を受けており、宋学の新しい自然観を取り入れていたことが知られる。また兼好は、宋学における四書である『論語』や『孟子』の思想を取り入れながら、民生安定の原動力である食の重視や為政者の倹約の必要性を力説していた。

以上、兼好の進取の意識としては、時代の変化を真剣に見つめることにより、実用的素養と為政者の倹約を重視し、その根拠を鎌倉幕府の伝統である質素倹約の気風や、大陸の新思想である宋学の言葉に見出だしていたと考えられるのではなかろうか。

【注】

(1)『徒然草』本文の引用は、小川剛生『新版　徒然草』角川学芸出版、二〇一五年による。また、傍線箇所等については、稿者によるものである。

(2)久保田淳「兼好における前衛性と後衛性」『国文学　解釈と教材の研究』第一七巻第九号、学灯社、一九七二年七月、二九頁。

(3)有吉保編『長明方丈記抄・徒然草抄』新典社、一九八五年、三四七頁～三四八頁。

(4)拙論「『徒然草』第二十二段における兼好の尚古思想について」『国文学試論』第二五号、二〇一六年三月。

(5)拙論「『徒然草』における多言を慎むことをよしとする章段をめぐって――『源氏物語』との関係を視座において――」『国文学試論』第二六号、二〇一七年二月。

(6)藤原克己「鎌倉時代における白詩受容とモラリスト文学の形成――長明・無住・兼好――」小島孝之編『説話の界域』笠間書院、二〇〇六年、三五頁～三九頁。

(7)宇野精一『新釈漢文大系3　小学』明治書院、一九六五年、二七四頁。

(8)川瀬一馬解説『徒然草寿命院抄』松雲堂書店、一九三一年。以下『寿命院抄』からの引用は同書による。

(9)和島芳男「金沢氏の学風と中世の宋学」『金沢文庫研究』第七巻第九号、一九六一年九月、六頁。

(10)麓保孝『中国古典新書　帝範・臣軌』明徳出版社、一九八四年、四七頁～四八頁。

(11)金谷治『論語』岩波書店、一九六三年。以下『論語』の引用は同書による。

(12)安良岡康作『徒然草全注釈　上』角川学芸出版、一九六七年、五二一頁。

(13)三角洋一「兼好の世界認識――徒然草を読む」『二〇〇二日本研究国際会議論文集』国立台湾大学、二〇〇二年一二月、一二頁～一三頁。

(14)注1所掲書の小川氏の補注89（二六三頁）による。

(15)注1所掲書の小川氏の補注33（二四一頁）による。

(16)益田勝実「微牛足あれば――『徒然草』の一背景――」『国語と国文学』第三五巻第二号、至文堂、一九五八年二月、六三頁。

(17)安良岡康作『徒然草全注釈　下』角川学芸出版、一九六八年、

三五四頁。

(18)三角洋一「『徒然草』の故事・詩話・諺と唐・宋仏教」『説話論集　第十三集　中国と日本の説話Ⅰ』清文堂出版、二〇〇三年一二月、三八三頁～三八六頁。

(19)注1所掲書小川氏補注82（二六〇頁）による。

(20)注17所掲書の五六四頁の下段を参照。

(21)永積安明『中世文学の成立』岩波書店、一九六三年、二一一頁。

(22)岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈　上巻』笠間書院、一九九六年、六四三頁。

(23)久保田淳「徒然草の源泉――和歌」『徒然草講座　第四巻』有精堂出版、一九七四年。

(24)田辺爵『徒然草諸注集成』右文書院、一九六二年、四七八頁。

(25)岩佐美代子『風雅和歌集全注釈　上巻』笠間書院、二〇〇二年、六一五頁。

(26)中川徳之助『兼好の人と思想』古川書房、一九七五年、二三八頁～二四一頁。

(27)久須本文雄『日本中世禅林の儒学』山喜房佛書林、一九九二年、三四頁。

(28)川本慎自「中世禅宗と儒学学習」『歴史と地理』六八七号、山川出版社、二〇一五年九月、三三頁～三四頁。

(29)曹景恵「徒然草における論語の受容」『中世文学』第四八号、中世文学会、二〇〇三年六月、九二頁。

(30)注1所掲書による。

(31)林羅山『野槌』は、吉澤貞人『徒然草古注釈集成』勉誠社、一九九六年による。以下『野槌』からの引用は同書による。

(32)内野熊一郎『新釈漢文大系4　孟子』明治書院、一九六二年。以下『孟子』の引用は同書による。

(33)宇野精一『新釈漢文大系53　孔子家語』明治書院、一九九六年、二五〇頁。